

## 忘れ得ぬ植物・漢方薬の学者——佐藤潤平

郭 秀 梅

順天堂大学医学部医史学研究室／北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究室

佐藤潤平(1896~1970)は秋田に生まれ、1917年に秋田師範学校を卒、1922年中国に渡り、1953年に帰国した。旧満州で過ごした30年間に、学校教諭・植物園園長・農場長・薬学院教授などを歴任している。その間、植物標本30万点・植物文献3万冊・植物写真7千余枚・図版数百枚という膨大な貴重資料を蒐集し、『満洲水草図譜』『満蒙通俗薬用食用植物』『満洲国内に漆樹の栽培を勧める』『満洲樹木図説』などを著した。

佐藤は祖父および父親の影響で、幼年より植物・漢方薬に多大な興味を持ち、自然の山野にとけ込んだ少年時代だったという。大正2年(1912)の師範学校在学中、植物採集と研究に夢中となり、植物標本づくりや園芸に驚異的成果を挙げ、大正8年(1919)には23歳の若さで『東北実用植物之新研究』を出版した。本書はおよそ植物の形状・効能・栽培法の項目で記載し、書末には有毒植物篇も設ける。しかし本書には本草文献の引用がほとんど見えず、主に日常の観察によったと考えられる。

いま生薬の効能を正確に臨床応用するための最大の問題は、恐らく時代および地域による植物名の相違だろう。したがって佐藤は早くより、中国の植物が分からなければ漢薬の原植物は解決できないことを認識した。そのため中国に渡り、30年間一途に中国植物を調査し、それらの種と分布を明らかにした。

特筆すべきは、多年にわたり、あらゆる機会を利用し、中国の東北・華北にわたる30余都市で百軒以上の漢薬店を尋ね、市販生薬の植物名と薬効を詳細に調査し、正確に記録したことである。これは当時の歴史状況からしても、佐藤潤平のみがなし得たことだった。それゆえ彼の記録や写真は、当時の中国における漢薬の使用状況をありのままに反映しており、現在に貴重な史料を遺したといえる。

例えば冬葵の調査結果にはこうある。

現中国の薬店では種子を冬葵子と称して応用している。原植物は昔がアオイ科のフユアオイの種子を冬葵子として応用したものであろうが、私が渡満した大正の終わり頃は、ほとんどアオイ科のイチビの種子であった。その後ソ連からアオイ科のケナフが満洲へ輸入栽培されるにいたってからは、ほとんどケナフの種子を冬葵子と称して薬用に供するに至った。

1950年代の中国では、中薬調査の全国キャンペーンを行い、佐藤など日本人の著作や資料が参考・利用されている。これら日本人の著作は、中国の生薬資源調査の空白を補填したと言えよう。佐藤は中国の30年および帰国後の20年で蓄積した知識と豊富な資料により、『漢薬の原植物』『薬になる植物』などを著した。そして中国と日本の薬店での生薬の取り扱いを比べつつあった。これらの著作は現代の植物の実態と薬効を如実に記載し、しかも多くは身近な生薬なので、その実用性は過去の本草書より高いと言っても過言ではない。

佐藤は中国大地に情熱を注ぎ、草木に親炙したのみならず、農村改革と農民指導にも挺身して成果をあげた。それゆえ引き上げの混乱期にも、大量の資料は農民により保護・運搬され、盛大な送別宴が催された。こうした長年にわたる多大の苦難にもかかわらず、誠心をもって中国に貢献したことにより政府・大衆の信頼を得て、のち大学教授および『中華人民共和国薬典』編纂委員に任命された。

佐藤潤平は植物・漢方薬の研究に一生を尽くした忘れ得ぬ人物である。大村明氏は彼の学問と人柄を、「植物と一緒に大地から生えてきた男、植物に関しては学の鬼で、人格も植物のごとく人を傷つける動物性がまったくない」と評している。